【Opera】チューリヒ歌劇場でフォークトが「歌曲の夕べ」

ワーグナー・テノールとして名を馳せているクラウス・フローリアン・フォークトのドイツ歌曲をチューリヒ歌劇場で聴いた。（2月23日所見）

子供のような純真な声でささやくようにハイドン《ごくありふれた話》を歌い始め、語り聴かせるような《満足》を経て、《人生は夢》で初めてレガートを聴かせ、そのレガートにクレッシェンドを加えて拡張させた輝かしい《ある少女への返事》へと発展させ、最後は水彩画のように歌詞を視覚化する《小さな家》で、この後に生まれるモーツァルトのタミーノを彷彿させる声を駆使し、ハイドンの世界を立体的に盛り上げていった。

続くブラームスは古典派の声のままで、その上、速いパッセージで声が各音にピタッとはまらず、説得力はなかったがロマン派の哀愁が加わった。《甲斐なきセレナーデ》の二重唱では、夫人のソプラノ歌手シルヴィア・クリューガーも登場した。

その後のマーラー《さすらう若人の歌》では一転してドラマティックな世界に浸った。救いのない表現にも明るさを失わない声、歌手になる前、彼はホルン奏者であったが、その楽器のように輝かしく鳴る響きと一抹の寂しさ、鋼のように張った声と柔らかくメランコリックな歌い回しという相対性が、彼特有の魅力であろう。そして最後のR.シュトラウス《ひそやかな誘い》他では自由に楽しんで歌い切り、アンコールも3曲披露した。

バイエルン州立歌劇場来日公演ではタンホイザーを歌うが、モーツァルト《魔笛》も演目にあるので、タミーノと両役歌って欲しいほどの幅広い実力を見せつけた。（中 東生）

ドイツ歌曲でもその実力を見せつけたフォークト
©中 東生